

第一ヨハネ 2 章 18 節をお開き下さい。この手紙を書いたのは最後の使徒ヨハネであります。ヨハネを除く全ての使徒はキリストの御名の故に迫害を受け、捕らえられ、そして中には拷問されそのまま亡くなった者もあります。酷たらしい処刑によって殉教いたしました。勿論例外は、イスカリオテのユダでありますけれども、ヨハネもかつては沸騰する油釜の中に生きたまま投げ入れられて、それこそ殉教するところでありました。しかし神様は奇跡的に無傷でこのヨハネをそこから救い出し、そしてヨハネには特別なミッションをお与えになりました。そして彼はなんと 100 歳以上地上での生涯を全うして、そしてそのまま天に召されていきました。晩年に書いたのがこのヨハネの手紙であります。おそらくは 100 歳近い、若しくは 100 歳を過ぎていたと思われます。ですから、長老とも呼ばれていたヨハネは常に教会においては「子供たちよ。小さい者たちよ。」とねんごろに語りかけました。教会の中には様々な年齢層があります。その年齢層というのは勿論肉体的な意味だけではなくて、霊的な意味でもあります。中にはまだ「幼児」と呼ばれる者たち、霊的にまだ未熟な者たちもあります。生まれたてのベビークリスチャンと呼ばれるような人たち、または中には「若い者」と呼ばれる者もあります。そして「父たちよ。」と言って、成熟してそして新しい生命を生み出すような者たちもいるわけです。先週はそのようなクリスチャン・ライフにおけるライフ・ステージの 3 段階、「小さい者たち」(幼子です。)、そして「若い者」、そして「父たちよ」というふうにも見てきましたが、今からまた 18 節を見て頂くと「小さい者たちよ。」と、霊的に言わば未熟なまだ幼い者たちに語りかけています。教会ではいろいろな霊的なレベルというのがありますので、常に幼い者たちに合わせて、ベーシックな内容を繰り返し語っていく必要があります。皆さんに何度も同じ様なことを繰り返してお話しているのは、この中にも霊的にはいろいろな成長段階があつて、所謂信仰の秤の大きさが違うというふうな言い方もありますが、そういう人たちがおりますので、いつでも成熟した者たちだけに語りかけるわけにはいきません。そういった者たちは「もう分かっている。何度も聞いた。」と言うかもしれません。それでもまだ幼い者たちは、初めて聞く人もあるわけですし、また忘れてしまう者もあるわけです。ですから常に皆さんにも心がけて頂きたいですけれども、教会で幼い者たちに対しては、常に同じ事でも良いですから大切な事は何度も繰り返して語るべきでありますし、分かち合うべきであります。「もうこの事は前にも言ったから、もう分かっているだろう。」というふうに勝手に思い込まないで頂いて、小さい子供には皆さんも子育ての経験があれば分かると思いますが、一度言ったら分かるというものではないですね。何度も同じことを言わなくてはなりません。思い起こさせるようにして、確かめるようにして、身に付けるように。そのように皆さんも成熟すれば必ず霊的にまだ若い者たちに教える立場になります。指導する立場になります。ですから、そのようにヨハネの模範に従って基本的なものを、大切なものを何度も繰り返して伝えていく必要があります。

もう一度前にもお話したアウトラインについても振り返りたいと思います。ヨハネの手紙、これは非常に分かりやすいアウトラインで 3 区分されるとお話ししました。1～2 章それは「光」という言葉で一言で表現出来ました。神の光です。ヨハネ全体は「神様ご自身を個人的に、人格的に体験する、経験する」というテーマでありましたが、まずは 1～2 章において神の光を経験するという内容でした。3～4 章は「愛」です。神の愛を経験する。そして残している 5 章は神の命。英語では 3 つの L (Light、Love、Life) 光、愛、命。3 つのキーワードでヨハネの手紙は 3 区分にアウトライン出来るわけです。今見ているのは 2 章の内容ですので、それは神の光を経験するという内容であります。『神は光であつて、神のうちには暗いところが少しもありません。』光の中を歩むクリスチャンは、暗いところが少しもないということでもあります。ですから、クリスチャンは「世の光」とも呼ばれます。世界の光、イエス・キリストも世の光、真の光。私たちがキリストに属する者として、この光を輝かせる存在として、世界の光という存在でもあります。ですから、クリスチャンが暗いということは、これはあつてはならないこと。本来は矛盾したことです。クリスチャンであるならば、暗いところが少しもない者でなければいけません。勿論いろいろな辛いことがあつて、悲しいことがあつて、気が沈んでしま

うこともあります。心が沈んでしまうこともあります。すっかりガッカリして、意気消沈して、あまりのショックでちよつと暗さを見せてしまう時もあると思いますが、でもそれはあくまで一時的なものであります。いつでも根暗で、いつでも下ばかり向いていて、そして暗い雰囲気を漂わせる。これはキリスト教的ではありません。キリスト的ではありません。いつでも否定的なことばかり、また皮肉なことばかり口に出している。これもまた光の中を歩んでいるとは言えません。神のうちには暗いところが少しもありません。否定的なものがないわけです。その光というのは「喜び」という言葉でも表現されていました。ですから、常にキリストは喜んでいる者。喜んでいないという状態は、暗いという状態であります。素晴らしいことに私たちがこの神の光を経験出来るわけです。神の光の中を歩むことが出来るんです。つまり否定的な思いだけで生きるのではなくて、常にネガティブな思いで一生生きてしまう人もいます。でも、キリストは光の中を歩むことが出来ます。たとえ罪を犯してしまって暗い体験をしてしまったとしても、闇の中に身を置くようなことがあったとしても、幸いなことに私たちには御子イエス・キリストの血潮によってすべての罪を、すべての悪を洗い清めて頂くということも出来ます。そのようにして私たちは、また暗闇から光の中へ引き出されて導き入れて頂くことが叶うわけです。ですから、すべてのキリストは神の光を経験出来ます。

今見ているところというのは、その神の光を経験するという中でも、時に私たちは暗闇を経験してしまうこともありますので、それに対する危険性、それに対する警告というものをしているわけです。光の中を歩む者たちにも時に闇が襲ってきます。時に闇があなたを惑わすこともあります。いろいろな誘惑もあるわけです。それに対する警告の言葉、危険を促すという言葉。その暗闇というのは勿論私たちの敵であるサタンが背後にいて働いてくるものであります。その辺を今から **18 節**から見ていきたいと思います。暗闇に対する危険性、警告。それを訴えるものです。長老のヨハネが「**小さい者たちよ、幼児たちよ、気をつけなさい。**」と。早速 **18 節**を見て頂きたいと思います。『**小さい者たちよ。今は終わりの時です。あなたがたが反キリストの来ることを聞いていたとおり、今や多くの反キリストが現われています。**(多くの反キリストというのは勿論複数形ですから、“反キリストたち”となります。)**それによって、今は終わりの時であることがわかります。**』終末の、世の終わりの前兆の一つに、多くの反キリストたちがこの世に現れ、あちらこちらに横行していくんだという一つのサイン、印でもあります。ヨハネだけが新約聖書の中で反キリストについて述べております。ヨハネの書いた書物というのは、**第一ヨハネ**は勿論のこと、**第二ヨハネ**、**第三ヨハネ**、そして**ヨハネの福音書**、そして**ヨハネの黙示録**。全部で 5 つの書をヨハネは新約に残しております。その中に反キリストについての言及が見られます。パウロも反キリストについて述べておりますけれども、でもヨハネほどではありません。反キリストという言葉は、ギリシャ語では「**アンティーキリストス**”antichristos”と言います。「アンティー」というのは英語の”anti”の語源でもあります。「キリストス」というのはキリストのことです。そのギリシャ語の「アンティー」というのは「**反対する、反抗する**」という意味だけではなくて「**取って代わる**」という意味があります。ですから、反キリストというのは、キリストに対抗する、キリストに反対する者でもあり、また同時にキリストに取って代わる者でもあるという二重の意味があります。勿論キリストについては説明する必要はないと思いますが、本来は「油注がれた者」王であり祭司であり預言者であるという一つのタイトル・肩書き・称号であります。

ヨハネの描く反キリストというのは、実は 3 種類あります。反キリスト、すなわちキリストに反抗する者・対抗する者、そして同時にキリストに取って代わる者。それはヨハネによれば 3 重の意味で語られています。3 人という意味ではなくて、3 種類ということです。まず第一番目に、すぐに皆さんが連想する反キリストは**一人の反キリスト**だと思われまます。彼については**ヨハネの黙示録 13 章、16 章、19 章**に出てきます。一人の反キリストについて、この人は EU から彗星の如く現れる世界総統。最初は平和の人として現れます。中東に 7 年間の和平条約をもたらす、おそらくはノーベル平和賞を受賞するような英雄となる人物ですが、でも途中で、すなわち 7 年の和平条約のちょうど中間期に、3 年半経った時に本性を現して独裁者として自らを神格化します。神として自分を捧むように強要します。自分を捧まない者を迫害するようになります。非常に狡猾であり、また素晴らしいタレントに多くの人たちは魅了されてしまいます。カリスマ的なリーダーです。「まるで救い主のようだ。」ユダヤ人たちも自分たちの失っていたエルサレム神殿を再建してくれるヨーロッパのリーダーであるこの人物、反キリストにすっかり魅了されて、自分たちのメシアだとすら

勘違いしてしまいます。でも、後で騙されたと気付くんですけれども、でも本性は実は悪魔の化身です。サタンが受肉した人物、それが反キリストと言っても過言ではありません。ですから、最初はまるで光の御使いのようです。でも、ある時からこの人は平和の人から、まさに悪魔の化身のように世界を治める独裁者となろうとするわけです。

次に 2 種類目の反キリストというのは、「反キリストの霊」という言葉で表現されます。第一ヨハネ 4:3、その「反キリストの霊」という言葉が見られます。『イエスを告白しない霊はどれ一つとして神から出たものではありません。それは反キリストの霊です。あなたがたはそれが来ることを聞いていたのですが、今それが世に来ているのです。』2 種類目は、これは人物というよりも霊です。反キリストの霊であります。この反キリストの霊、反キリストのスピリットというのは、ありとあらゆるところで活発に働いています。これは昔から反キリストの霊というものは働いているわけです。例えば反キリストの霊というのは、かつてはエジプトのパロのうちに働いておりました。ファラオです。400 年間も神の民イスラエルを苦しめたわけです。そして滅ぼし尽くそうとしたわけです。また、この反キリストの霊は同じく旧約聖書の中に登場するペルシャ帝国時代のハマンという人物のうちにも働いておりました。ハマンはユダヤ人を^{せんめつ}殲滅しようとしたわけです。抹殺しようとしたわけです。また近代においては、20 世紀にこの反キリストの霊はアドルフ・ヒットラーのうちに働きました。600 万人ものユダヤ人たちが虐殺されたわけですけれども、他にもあまり日本ではそれほど紹介されませんが、スターリンという人も実はヒットラーにまさる虐殺者でありました。20 世紀最大の虐殺者と言えば、実はヒットラーではなくて、スターリンであります。スターリンという人は、勿論かつてのソ連における独裁者でありました。この人はやはり反ユダヤ主義を持って、多くのユダヤ人たちを虐殺しました。大粛清と呼ばれる大虐殺を行ったんですが、勿論ユダヤ人だけではないのですけれども、自分の体制に反対する者たちをことごとく殺していったわけですが、その数は 2,000~5,000 万人とも言われています。そのスターリンですけれども、なぜそのような虐殺ができたのか。いろいろな説明もなされますけれども、私たちクリスチャンは彼のうちには反キリストの霊が働いていたというふうに見て、それが 1 番実は説明のつく解釈だと思います。それ以外には説明のしようがないほど、なぜスターリンは、なぜヒットラーはそのように多くの人を虐殺していったのか、説明がつかないわけですが、実はスターリンという人は、かつてはクリスチャン・ホームに育ち、そして日曜学校でも子供たちを教えるような熱心な信徒でありました。そして彼はそのまま神学校に入りました。当時はロシア正教の神学校です。聖職者を目指したわけです。司祭を目指したわけです。でも、神学校で学んでいるうちに神を否定するような書物に多大な影響を受けて、そして最終的には無神論者になってしまいました。それが共産主義に繋がっていくわけですが、そしてそれが大粛清に繋がっていくわけです。反ユダヤ主義もあからさまに、そして何の根拠もないのにユダヤ人を始めとした多くの人たちを憎み、そして平気で殺すようになりました。その背後には、反キリストの霊が働いていたとしか言いようがありません。そのような反キリストの霊が、世の終わりにおいても活発になります。

これは昔から働いていたものですが、今見ているテキストの**第一ヨハネ 2:18** に出てくる反キリストは、これは複数の反キリスト。1 人や 2 人ではなくて、多くの反キリストたちが大挙して現れる。それが世の終わりの前兆・印であると言われています。それが 3 種類目です。反キリストは、ヨハネによれば 3 重の意味で、3 種類の反キリストが存在するという事です。1 つは**たった一人の反キリスト**。ヨーロッパのリーダーとして現れます。この人も勿論反ユダヤ主義者であります。2 種類目は**反キリストの霊、スピリット**です。そして 3 種類目が「**多くの反キリストたち**」。具体的にはこの「**多くの反キリストたち**」というのは、単なる反ユダヤ主義者ではなくて、特にこの文脈においては、この反キリストたちとは、所謂偽教師たちのことです。偽宣教師、偽伝道者と呼ばれる人たち。偽牧師と呼ばれるような人たちです。具体的には、イエス・キリストの神性、神としての性質を否定し、またイエス・キリストの卓越性・優れた卓越しているところ、それを否定して、イエス・キリストという方を過小評価する者たちであります。「イエス・キリストは神ではない。」その教えというのは、当時はグノーシス主義という異端的な教えでもありました。そのグノーシス主義の危険性について**第一ヨハネの手紙**にもそこかしこに述べられているのですが、その他にも**コロサイ人への手紙**、また**ヘブル人への手紙**。多くの新約聖書の執筆事情には、その背景には、グノーシス主義という異端的な教えがありました。「イエス・キリストは、神と等しいお方ではない。イエス・キリストはただ単に神に造られた存在であって、神ご自身で

はない。神に劣る存在である。」それほど卓越していないということです。そのような教えが、ヨハネが宛てたこの手紙です。それはエペソの教会でありましたが、そのエペソの教会に反キリストの教えが蔓延していたわけです。すべての異端、すべてのカルトに共通している点、それはイエス・キリストを否定するという教えです。「イエス・キリストは神ではない。イエス・キリストはそれほど優れていない。」その卓越性、その神性というものを否定する者。それがすべての異端、特にキリスト教系の異端のことです。そしてカルトの共通した特徴であります。ピリポというイエスの弟子はかつて「私たちに父を見せて下さい。」父なる神を見せて下さいとイエスに懇願しました、リクエストしました。ヨハネ 14 章に書いてあります。そしてイエスは一言「わたしを見た者は父を見たのです。」と。イエスを見る者は父を見るのだと。要するにイエスの言わんとしていることは、イエスは父と同等のお方。他にもイエスは「わたしと父とはひとつです。」というふうにもおっしゃいました。それはキリスト教の正当派の教理である三位一体の教理でもあります。父なる神、子なる神イエス・キリスト、そして聖霊なる神。3 位格は一体である。3 人の神ではなくて、3 つの人格・位格があるんですけれども、同時にこの方はひとつのお方。一体化された唯一の神であると。それが聖書の教えであります。でも、異端的な教えは、「イエスは神ではない。イエスは聖書でご自身宣言されているようなお方ではない。」すなわちイエスは何度となくご自分を主と宣言されているわけです。ヤーウエと宣言されているわけです。ヨハネの福音書でも「わたしは、ある。」これはヤーウエという神の個人名の意味ですけれども、そのヤーウエ宣言をされているわけです。「わたしは、ある。命のパンです。」「わたしは、ある。世の光です。」「わたしは、ある。羊の門です。」「わたしは、ある。良い牧者です。」「わたしは、ある。よみがえりです。いのちです。」「わたしは、ある。道であり、真理であり、いのちです。」と。また「わたしは、ある。まことのぶどうの木です。」とか、何度となくイエスは所謂ヤーウエ宣言、または神宣言というものをしているわけです。だから誰も「イエスはご自身を神と宣言しなかった。」とは言えないわけです。「わたしはアブラハムが生まれる前からいるのです。」と、これもヤーウエ宣言です。ギリシャ語では「エゴー・エイミー」と言いますが、それを聞いた当時のユダヤ人たちは「イエスが神であると自分で宣言した。これは冒涇だ。」と言って、石を持って打ち殺そうとしました。石打ちの刑にしようとしたわけです。なぜならば、イエスがご自身を神と等しくされていたから。ですから、イエスは「間違いなく自分が聖書に啓示されている神である。」と何度も宣言されているわけです。でも、異端的なグループは、カルトは、「イエスは自分で神と言った事は 1 回もない。イエスはあくまで神に造られたものである。」と、そう言い張るわけです。それはグノーシス主義が元であります。そのようにしてヨハネの時代にもあった異端は、グノーシス主義と呼ばれているものは、2000 年経った今でも名前を変えて沢山の異端、沢山のカルトの中で息づいているわけです。それに対して私たちは注意するように、そのような暗闇にはくれぐれも気を付けるようにという警告の言葉をこの手紙から与えられております。グノーシス主義というのは、イエスの神性、イエスの卓越性というものを真っ向から否定するわけですが、「イエスは神ではなくてただの人であった。ただし、そこにはキリストの霊が宿ったのだ。」と、グノーシス主義はそう主張します。「イエスは最初は人間だったんですけれども、バプテスマのヨハネから洗礼を受けた時に、その時にキリストの霊が、(そこでもちょうど鳩のように聖霊が降ったという件がありますけれども)その時にイエス・キリストは神の力を得て神のようになったと。ところが十字架につけられる時にはイエスからキリストの霊は離れていったんだ。」と、あくまでグノーシス主義者は二元論というものを説いているわけですので、「神が肉体を持っているとは考えられない。」と。「すべて肉体は悪である。」ですから肉体を持った神、受肉された“ことば”、受肉された神であるイエスが、神であるということは認め難いことなわけです。ただし、「すべて霊なるものは善である。」と。ですから、「キリストの霊が、それが神ということであって、イエスという方は神ではない。」と。「ただ、イエスにも神の霊がバプテスマのヨハネから洗礼を受けてから、そして十字架につけられるまで宿っていたんだ。」と、「神のように生きていた。」という言い方をします。十字架の上で「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか。」とイエスが叫ばれました。その時にキリストの霊が離れて行ったんだと、グノーシス主義者たちはそのように主張するわけです。それらは全て聖書の裏付けのない全くの逸脱した異端的な教えであります。

今からその彼らの異端的な教えについて、このテキスト**第一ヨハネ 2 章 19 節**以降に具体的にその彼らの教えが

どのようなものか、反キリスト的な教えとはどのようなものか。反キリスト的な偽教師たち、偽牧師たちが教える教えとは具体的にどのようなものであるのか、大まかに3つに分けてヨハネは説明してくれております。**19節**以降です。

まず、反キリスト的な教えをする人たちは、**教会を去っていく者たち**であります。**19節**にあります。教会を離れていく者たち。それは反キリスト的な人たちであります。3つのことで2番目ですが、それは**20～25節**にあります。彼らは**キリストの神性を否定する者たち**。イエスがキリストであることを否定する者たちであります。そういう教えをするということです。3番目は**26～29節**。その反キリスト的な教えをする人たちは、必ず惑わそうとします。**惑わす者たち**であります。これが反キリスト的な教えをする者たちの特徴でもあります。まず**19節**にある、教会を離れ、教会から去っていく。そして2番目は**20～25節**にあるように、イエスがキリストであることを否定する、キリストの神性を否定する者たち。最後の3番目は、クリスチャンを惑わそうとする者たち。この3つの特徴、教えの特徴と言っても良いと思いますが、そこを皆さんにも意識して頂いて、今からその一つ一つを見ていきたいと思っております。それらがヨハネが言うところの暗闇でもあります。暗闇について。すなわち、これは反キリストについての教えであります。その反キリストが世の終わりになると多く出てくる。沢山登場するというので、勿論彼らは教会の中から現れてくるということでもあります。

ここで参考までに**マタイの福音書 24:4～5**を見て欲しいと思っております。そこにもイエス・キリストが世の終わりの前兆について預言しているんですが、その予兆の一つとして、前兆の一つとして『**そこで、イエスは彼らに答えて言われた。「人に惑わされないように気をつけなさい。わたしの名を名乗る者が大ぜい現われ**（自称クリスチャンという人たちが沢山世の終わりになると現れてきます。そして）、**『私こそキリストだ。』**と言って、**多くの人を惑わすでしょう。』**私こそキリストだと。そういう人たちも現れます。例えばオウム真理教の麻原彰晃もそうです。また統一協会の文鮮明もそうです。「私こそキリストだ。再臨のメシアだ。」と、そういう人たちが沢山現れます。世界のあちらこちらに、大勢そういう反キリストを名乗る者たちが現れるわけです。アメリカには200人も「我こそはキリストだ。」と名乗る者がいるそうです。インドにはキリストを名乗る者が1,000人もいるそうです。世の終りになるとそういう者たちが多く見られるようになります。

そして、もう一度**第一ヨハネ 2:19**をお読みします。『**彼らは私たちの中から出て行きましたが**（私たちの中からというのは勿論キリスト教会の中から出て行きました。かつては教会員だったわけです。かつては教会で奉仕をしていたわけです。教師をしていたわけです。）、**もともと私たちの仲間ではなかったのです。**（つまりクリスチャンではなかったと言っているわけです。）**もし私たちの仲間であったのなら**（もし彼らが新生したボーン・アゲイン・クリスチャン、本物のクリスチャンであったのなら）、**私たちといっしょにとどまっていたことでしょう。**（教会の中にとどまっていたことでしょう。）**しかし、そうなったのは、彼らがみな私たちの仲間ではなかったことが明らかにされるためなのです。』**反キリストについてですが、まずはその反キリスト的な教えをする偽教師・偽牧師、また反キリスト的な人物、彼らは皆自称クリスチャンであります。でも、そもそもは教会から出て行ってしまった者たちですけれども、もともとは仲間ではない、クリスチャンではなかったと。救われてはいなかったんだと言っているわけです。ただ誤解しないで下さい。ここで言っている教会というのは、地域教会のことを言っているのではありません。キリストの体としての、全体としての普遍的な教会のことを言っております。ですから、例えばこの教会、マラナサ・グレイス・フェローシップから出て行った者は皆反キリストだと言っているのではありません。またこの教会には、いろんな教会を出てきて集まってきている吹きだまりのような教会になっていますけれども、そうするとMGFのメンバーは皆反キリストだということになりますので、そういう話と混同しないで下さい。MGFから出て行った者たちは皆反キリストだと、見下して断罪してはなりません。そうではありません。そうではなくて、もう所謂どの教会にも属さない。教会なんか要らないんだと、「正統派のキリスト教会は皆間違っている。」そういう人たちがここで言われている反キリストのことです。「教会なんか行かなくても、教会に繋がらなくても、自分だけで信仰を守っていけるんだ。自分だけで神を体験出来るんだ。自分だけで神の光の中を歩むことが出来るんだ。」と主張する人たちが反キリストであります。また、そう教える人たちが偽教師・偽牧師と呼ばれる者たち。勿論彼らは自らをクリスチャンと名乗ります。「教会なんか必要ない。」教会はキリストの体であります。「体なんか必要ないんだ。」と言っているわけです。恐ろしいです。体が必要ない。彼らは「教会は皆腐敗して

いるんだ。間違っているんだ。」と、そして教会を去って、離れていきます。そんな人たちはそもそもが救われていなかった可能性があると言っているわけです。ですから、もしかしたら皆さんの知っている者の中に、まさに反キリスト的なことを考え、主張している人たちがいるかもしれません。「教会なんか要らないんだ。」その人たちはもしかしたら、そもそも救われていない人たちであろうかと思えます。勿論彼らに必要なのは裁きではなくて、福音であります。イエス・キリストが彼らには必要であります。イエス・キリストのことを宣べ伝えていく必要があります。今さらではなくて、もともと最初から彼らはイエス・キリストなど知らないんです。名前は知っているかもしれませんが、本当の意味でのキリストを知らずに、本当の救いは受けていないわけですから、彼らにも福音を伝える必要があるわけです。そして彼らにもこの聖句を突きつける必要があります。「教会など要らない。教会に繋がる必要はないんだ。」と言う人は、**第一ヨハネ 2:19** を知る必要があります。『**彼らは私たちの中から出て行きましたが、もともと私たちの仲間ではなかったのです。もし私たちの仲間であったのなら(本当にあなたが救われた真のクリスチャンであるならば)、私たちといっしょにとどまっていたことでしょう。(別に MGF から出て行っても構いません。でも、どこか他の正統派のキリスト教会に属するべきだということです。「どこにも教会には行かない。どこにも繋がっていかない。」と言うのであれば、この聖句を突きつけていく必要があります。)**しかし、**そうだったのは、彼らがみな私たちの仲間ではなかった(クリスチャンでなかった)ことが明らかにされるためなのです。』**「あなたがどの教会にも行かないならば、あなたは自らをノンクリスチャンだと宣言していることとなりますよ。」と、そのようにあなたは伝えてあげる必要があります。「教会なんか必要ない。自分ひとりで礼拝だって出来るんだ。」と言っている人たちは、自らノンクリスチャンであることを宣言しているわけです。そのことを伝えてあげて欲しいと思います。勿論救われていなければ、そのままでは天国には行けないわけです。死ねばあなたは天国ではなくて、天国ではないところに、すなわちハデスと呼ばれるところに、ゲヘナと呼ばれる地獄の一步手前、地獄の待合室のようなところに、あなたは居ることになるわけです。そして大きな白い御座の裁きを経て、最終的には火の池と呼ばれるそのゲヘナ、地獄に落ちるようになるわけです。ですから、彼らには救われていく必要があるわけです。

そして、かつては教会の中にいたけれども「教会なんか必要ない。教会は皆間違っているんだ。」と主張して出て行って、どの教会にも繋がらずに、自分勝手な聖書解釈によって勝手なグループを築いた人たち。典型的な例として、キリスト教系の異端、特に三大異端を皆さんに覚えて欲しいと思います。もう皆さん知っていると思いますけれども、まずは「エホバの証人(ものみの塔聖書冊子協会とも言います。)」通称「エホバの証人」。その「エホバの証人」を創始したのは、チャールズ・ラッセルという人です。チャールズ・ラッセルは当時愛称として「パスター・ラッセル」と呼ばれていました。「パスター」とは、英語の「牧師」のことです。「ラッセル牧師」と皆から呼ばれていたんです。チャールズ・ラッセルは、かつては教会の中に身を置いていました。彼の一家は敬虔なクリスチャンと呼ばれていました。長老派の教会に通っていたんです。YMCA にもラッセルは入会していました。でも、9 歳の時にお母さんを亡くして、そしてその後は自宅の近くにあった「組合教会」に行くようになりました。会衆派の教会です。ユニオン・チャーチに行くようになりました。でも、その中でラッセルは「どうも自分の考えとは合わない。納得いかない。」という思いが強くなって来て、例えば「地獄なんていうのは、これは受け入れ難いことである。神が裁くなんていうのは、これはとても恐ろしいことで、信じ難いことである。」と言って、地獄の教理というものを否定するようになります。また「イエス・キリストが神である。これも信じ難いことである。」三位一体の教えも否定するようになります。沢山のエホバの証人の特徴的な教えがあるわけですが、全てラッセルという人が「自分にとって納得がいけない。自分が理解出来ない。自分にとって都合が悪い。信じたくない。」そういうものを自分で独自に教理化していったわけです。勿論そういう教えは正統派のキリスト教の教理と相反するものです。聖書から逸脱したものですから、もう教会には居られなくなるわけです。そして正統派の教会を非難するようになります。そして自分たちのグループを形成するようになるわけです。エホバの証人もやはりキリスト教系の異端ですから、もれなくイエスがキリストであることを否定します。勿論エホバの証人の人たちは皆「私たちはイエス・キリストを信じています。私たちはクリスチャンです。」と言います。エホバの証人に出くわしたら聞いてみて下さい。「あなたはクリスチャンですか。」と聞けば、彼らは「はい、そうです。私はクリス

チャンです。」と彼らは答えます。でも、彼らが主張するイエス・キリストは、神ではありません。エホバの証人によれば「イエス・キリストは神に造られた被造物であって、創造者ではありません。具体的には神に造られた天使の一人ミカエルである。ミカエルが人間の姿をとったのがイエスである。」と、エホバの証人は主張します。

もう1つキリスト教系の三大異端の1つで「モルモン教」というものがあります。これは通称で、正式名は「末日聖徒イエス・キリスト教会」と言います。「イエス・キリスト教会」と如何にも本物っぽい名前が付けられています。「末日」というのは、世の終わりのまさに選ばれた教会、イエス・キリストの教会だと。「末日聖徒イエス・キリスト教会」勿論モルモン教の人たち、モルモン教徒と呼ばれる人たちも自らをクリスチャン、しかも「私たちはボーン・アゲイン・クリスチャンだ。」とも言います。そのモルモン教を始めた人、ジョセフ・スミスという人です。彼もチャールズ・ラッセルと共にアメリカ人でありますけれども、クリスチャン・ホームで育ちました。そして17歳の時にジョセフ・スミスは神からの啓示を受けた、と主張しています。17歳の時です。その時にジョセフ・スミスは神からこう聞いたそうです。「すべての既存の教会は間違っている。どの教会にもあなたは行ってはならない。」そう言われたそうです。そして、ジョセフ・スミスは自らの私的解釈に基づく教理を作り、『モルモン経』という、これも聖書と同等の権威を持つ独自の教理書というものを作って、そして正統派の教会には属さない独自の教会というものを作り上げました。モルモン教もやはりイエスは神ではない。むしろイエスは神に造られた御使いの一人でルシファーのお兄さんである。」と。ルシファーというのが墮落してサタンになっていくわけですが、要するにサタンのお兄さんがイエスであると、モルモン教は教えるわけです。これもやはり形を変えたグノーシス主義であります。

そしてもう一つのキリスト教系の三大異端、それは統一協会であります。正式名は「世界基督教統一心霊協会」です。俗称が「統一協会」であります。始めたのはご存知の文鮮明であります。韓国人であります。この人もまた実は教会で育ったんです。クリスチャン・ホームで育ったんです。一家は皆熱心なクリスチャン・ホームでした。この3つの三大異端の創始者に共通している事は、かつて彼らは教会に属していたんです。かつて彼らはクリスチャン・ホームで生まれ育った人たちです。そのことを覚えて下さい。クリスチャン・ホームで生まれ育てば、皆自動的にクリスチャンになるのだと思ったら大間違いです。中には異端的な教えを持ってカルトを作るような者たちも現れると言っているわけです。これが現実であります。文鮮明も韓国の長老派の教会に通っていました。非常に熱心であって、日曜学校でも教師を務めていました。彼は16歳の時にイエス・キリストが目の前に現れて、そしてイエスが彼に懇願したそうです。「わたしが果たせなかった神のみ旨を、あなたが代わりに担ってもらいたい。」そして文鮮明はそのことをヘブル語なまりの入った韓国語で聞いたそうですけれども、最初は恐れ多いと思ったそうですが、何度も何度もイエスが懇願してくるので、仕方なく「分かりました。私があなたのやり残した仕事を代わりに担いましょう。」と言って、文鮮明は自らを「再臨のメシア」と名乗って、そして統一協会をスタートしていくわけです。勿論統一協会も「イエスが神ではない。」と主張します。これもグノーシス主義であります。彼らは何と言っているかという「イエスは祭司ザカリヤ（それはバプテスマのヨハネのお父さんでもあります。）とあのマリヤとの間に生まれた子供こそがイエスである。」と。不倫の結果生まれた子がイエスだと言っているわけです。とんでもないです。それが反キリストの特徴です。反キリスト的な教えをする者たちの特徴であります。

それは勿論キリスト教系の異端だとか、宗教としてのカルトだけの話ではありません。無神論を主張する人たち、ヒューマニズムを信奉する人たち、哲学者と呼ばれる人たちの中にも、この反キリスト的な人物はいるわけです。例えば「イエスが神ではない。イエスは確かに歴史上実在した人物ではあるけれども、イエスはキリスト教の開祖である。例えば仏教の開祖がブッダ、釈尊、ゴータマシッダールタであったように。またイスラム教の開祖がムハンマド、モハメドであったように、キリスト教の開祖はイエスである。」と。勿論開祖というのは、神ではありません。ただの人間です。教祖という存在であります。または「イエス・キリストは聖人であった。ソクラテスのような聖人であった。立派な教えをした、道徳の教師である。」それは必ずしもカルトの人たちでなくても、無神論者、ヒューマニストと呼ばれている人たちも「イエスは神ではない。」と主張します。でも、それについてかつて無神論者であった、かつて不可知論者であった（不可知論者とは、結局は人間は神を知ることが出来ないという立場ですが、無神論のことでもあります）

れども。)その無神論者でもあった、イエスが神とはとても信じ難いと主張していた人で、かつてはオックスフォードの大学で教鞭をとっていた人でもあります。そしてその人は児童文学者でもある人ですが、C.S.ルイスという人、この人が素晴らしい本を書いております。イエスが神ではないと主張する人たち、イエスがただの道德の教師、聖人の一人だとしか考えていない人たちに対して、素晴らしい本を書いて、その中で素晴らしいコメントをしております。その本というのは『キリスト教の精髓』という本です。是非皆さんに読んで頂きたいお勧めの本でもあります。その中でこう言っています。「単なる人間にすぎない者が、イエスが言ったようなことを言ったとしたら、そんな者は偉大な道德の教師どころではない。(“イエスが言ったようなこと”というのは、イエスはヤーウェである。イエスは神である、という宣言です。)彼はキチガイか、「俺はゆで卵だ。」と言ってきかない男と同類のキチガイか(精神病院に入院しているような人のことです。)さもなければ地獄の悪魔か、そのいずれかであろう。ここであなた方はどっちをとるか決断しなければならない。この男は、イエスは神の子であったし今もそうだと考えるか。さもなければ狂人、若しくはもっと悪質な者と考えるか。彼を白痴として監禁し、これにつばを吐きかけ、悪鬼として打ち殺すか。さもなければ、彼の前に平伏して、これを主、また神と呼ぶか。そのどちらかを選ぶかは、あなた方の自由である。しかし彼を偉大な教師たる人間などと考えるお為ごかしのナンセンスだけはやめようではないか。彼はそんなふうを考える自由を我々に与えてはいないのだ。そんな考え方は元々彼の意図に含まれていなかったのである。」と。イエスがただの道德の教師だと主張する人たちは、全くナンセンスなことを言っているんだと言っているわけです。なぜならば、イエスはご自身のことを神と宣言しているからです。精神異常者か、悪魔か、若しくは本当に宣言された通りの方か。そのどちらか選ばなければいけないと言っているわけです。道德の教師なんていうことはあり得ないと言っているわけです。道德の教師だったら、自分を神なんて言わないわけですから。そんな主張はナンセンスだと言っているわけです。イエスはキチガイか、狂人か、悪魔か、それとも宣言されたとおりの神であるのか。人は選択しなければいけません。その選択するのが嫌なので、適当に「イエスは確かに偉人であった、聖人であった。キリスト教を始めた開祖である。道德の教師だ。」と、そういう言い方をしますけれども、それは全くナンセンスな話だとC.S.ルイスは指摘しております。全克的を射ていると思います。ですから、もし皆さんが「イエスは神ではない。ただの道德の教師だ。」と主張する人が皆さんの知っている者の中にいるなら、出くわしたならば、是非 C.S.ルイスと同じようにチャレンジして頂きたいと思います。

また他にもイエス・キリストを否定する者たち、特に教会の中から出て行った者たちで、彼らは必ずしも異端だとか、カルトとは呼ばれておりません。彼らは如何にも正統派のキリスト教会の一員というふうになされています。そして世界中に彼らははびこっています。そういう存在についても触れておきたいと思います。彼らは教会の中から出て行ったエホバの証人やモルモン教や統一協会というあからさまな形をとっておりません。でも、その教えは反キリスト的であるというものであって、注意を促しておく必要があります。その教えというのは、“**言葉信仰**”という言葉で表現されます。Word faith、そのような言葉信仰を教える人たちの事を、**信仰教師 faith teacher** というふうにも言います。具体的に言葉信仰というのはどういうことかという、単純明快に言葉を信仰する人たちは、神ではなくて、言葉を信仰する人たちは、「自分の言った通りに信じれば、言った通りになるんだ。」と、そういう教えであります。それを様々な表現で、例えば“**積極的告白**” positive confession「否定的なことばかり言うとな否定的な人生しかない。でも、積極的なことを口にしていれば常に積極的な生き方をすることが出来る、肯定的な生き方をすることが出来る。」または、それらは“**繁栄の福音**” prosperity gospel とも呼ばれます。繁栄するように具体的に「いくら欲しいです。」とか、「どんな高級車が欲しいです。」とか、「どんな邸宅が欲しいです。」とか、そういうことを口に出して宣言する。そうするとその言葉を信じる者には、その言葉通りのものが与えられるといった繁栄が約束される。そういう異端的な教えが所謂キリスト教界の中に蔓延しております。特に韓国、アメリカといった国々、また一部アジアの国でも今流行っております。彼らの教えを私たちはしっかりと見分けていく必要があります。聖書によって見分けていく必要があるのですけれども、反キリスト的な教えをしていますので、その特徴として彼らはイエスの神性というものを否定すると言いました。ですから、見分ける 1 つの手段として、こういった所謂信仰教師と呼ばれる人たちもやはり反キリ

スト的であるので、イエスの神性を否定する者たちでもあります。

その有名な人たちの有名な教えを、または宣言、キリストを否定するといったその発言、いくつかを皆さんに紹介しておきたいと思います。どこかで聞いた名前もあるかもしれませんが。有名な人たちばかりですけれども、その信仰教師の中の“導師”と呼ばれている、“グル”と呼ばれている人がおります。もう亡くなった人ですけれども、ケネス・ヘーガンという人がいます。この人はこういうことを言っています。「上から生まれた人間は(ボーン・アゲインした人間のことで。新しく生まれた人間は)、一人一人が神の化身なのであり、キリスト教とは奇跡である。信仰者はナザレのイエスと同じように誰もが神の化身なのである。」と。要するに言っていることは「クリスチャンは皆神だ。」と言っているわけです。「イエスと同じ神だ。」と言っているわけです。また同じくケネス・ヘーガンは「信じる者たちはキリストと呼ばれた。私たちは誰でしょうか。私たちはキリストなのです。」ケネス・ヘーガンは宣言しています。自らはキリストであって、クリスチャンは皆キリストであると。

現在その信仰教師の看板の 1 人ともなっているケネス・コーブランドという人、ケネス・ヘーガンの弟子でもあります。ケネス・コーブランドという人もこういうことを言っています。「犬が犬を生み、猫が猫を生むように、神が生み出すのは神々である。私たちは全員小さな神々なのである。」ケネス・コーブランドは続けて「あなたは完全に神なのだ。」とクリスチャンたちに言っています。

そしてこの名前は皆さんも聞いたことがあると思います。日本でもお馴染みの、日本にも何度も来日しているベニー・ヒンという人がいます。この人も勿論信仰教師の看板の 1 人でもあります。彼はこういうことを言っています。「私たちは小さな神々であり、神のあらゆる力を備えた神の一部なのです。また私たちは小さなメシアであり、イエスがかつてそうであられたすべての性質を持っているのです。あなた方は「私はクリスチャンです。」と言う時、ヘブライ語であなたは「私はメシアだ。」と言っているのです。つまり私はこの地上における小さなメシアなのです。これは驚くべき啓示です。違った言い方をさせて下さい。あなたは回転する地球における小さな神なのです。また私がキリストにあって立つ時、私は彼と 1 つであり、1 つの霊なのです。聞いて下さい。私は神の一部ではなくて、私が神なのです。御言葉は私の中で肉となったのです。私の手が誰かに触れる時、それはイエスの手が彼に触れているのです。」

これが信仰教師たちの教えです。彼らは勿論自分たちを、キリスト教会、正統派のキリスト教会、福音派であると自ら宣言します。でも彼らの言っているイエス・キリスト、または神というのは、聖書の神でもなければ、聖書のイエス・キリストでもありません。実際に彼らが信奉しているのは、言葉です。神よりも言葉を信じているわけです。自分たちが宣言した言葉、主張した言葉、神に要求した言葉、それらは全て神が応えなければいけない。つまり彼らにとって神というのは、彼らの言葉よりも低い存在。彼らの言葉の権威に劣るのが、彼らの言う神ですから、それはまるで妖精のような、サンタクロースのような存在です。そのように神を、またイエス・キリストを自分たちに従う、自分たちの要求に何でも応える、まるでしもべのようなものとして引き降ろしているわけです。キリストを引きおろす。これがグノーシス主義の特徴であります。キリストの卓越性を否定する教え、それがグノーシス主義であります。今言った具体例は勿論ほんの一部に過ぎません。是非気を付けて頂きたいと思います。キリスト教系の三大異端に引っかけることはないかもしれませんが。でも、こういった**言葉信仰の教理、積極的告白**であったり、または**繁栄の福音**という教え。それらは世界の多くの教会で信奉されています。韓国にある世界最大の教会、70~80 万人を擁するその教会の牧師も信仰教師の 1 人です。勿論チョー・ヨンギという人です。ですから、そういった教えがこの日本にも勿論輸入されているわけです。気を付けて欲しいと思います。

テキストに戻って頂いて今度は反キリストの特徴として、彼らはかつては教会に身を置いた者、教会に属した者であったんですが、教会から出て行って、教会から離れて、却って「教会は必要ない。」と既存の教会を否定する者たち、伝統的な聖書的な教えを真っ向から否定する者たち。それが反キリストであり、その教えを説く者は皆反キリストであると。偽教師、偽牧師だという話をしました。

2 番目の特徴として **20~25 節**に見られるものとして、彼らはキリストの神性を否定するという点です。これも皆今

お話した通りですけれども、改めて **20～25 節** お読みします。『**20** あなたがたには聖なる方からの注ぎの油があるので、だれでも知識を持っています。²¹ このように書いて来たのは、あなたがたが真理を知らないからではなく、真理を知っているからであり、また、偽りはすべて真理から出てはいないからです。²² 偽り者とは(嘘つきとは)、イエスがキリストであることを否定する者でなくてだれでしょう。御父と御子を否認する者、それが反キリストです。²³ だれでも御子を否認する者は、御父を持たず、御子を告白する者は、御父をも持っているのです。²⁴ あなたがたは、初めから聞いたことを、自分たちのうちにとどませなさい。もし初めから聞いたことがとどまっているなら、あなたがたも御子および御父のうちにとどまるのです。²⁵ それがキリストご自身の私たちにお与えになった約束であって、永遠のいのちです。(救いであるということです。)]“とどまる”という言葉が、何度も今読んだところにも繰り返し使われていたことにも注目して頂きたいと思います。“とどまる”。出て行くのではなくて、とどまるのです。離れるのではなくて、とどまるのです。そしてもう一つのキーワードとして“知識”という言葉であったり、または“知る”という言葉です。ギリシャ語は「エイド」"eido"若しくは「オイダ」"oida"と言います。同じ言葉ですけれども、意味としては「ただ知る。ただ知識」という意味ではなくて、特に「直感する。」または「直覚」という言葉があります。「直感的に知る。直覚する。」直感的に物事を認識するというのとはどういうことかということ、「さっと見ただけで分かる。瞬時に判別出来る。」といったものです。瞬間的に直接的に物事の本質を見て取る。それが直覚すとか、直感するという言葉です。この「知る」「オイダ」または「エイド」という言葉が **20 節** のところに使われておりますけれども、**21 節** にも「知る」という言葉、そして **29 節** にも使われています。**2 章** では既に先週見たところですがけれども **11 節** にも使われています。**第一ヨハネ 2 章** の中では **11,20,21,29 節** で使われている「知る」とか「知識」というところに、「オイダ」とか、または「エイド」という言葉が使われております。「直覚する。直感する。」または「絶対的知識」という言い方も出来ます。その一方でギリシャ語にはもう一つ「知る」という言葉があります。それは「ギノスコー」という言葉です。それは「経験的に知る」という言葉、前にも紹介しました。そして「エイド」若しくは「オイダ」、それは「直覚的に知る。直感的に知る。」ぱっと見て瞬時に分かってしまうという知識のことです。「経験的に知る」というのは、ぱっと見では分かりません。徐々に体験を通して知っていくというものです。それと違う言葉が、「ギノスコー」でない言葉です。)ぱっと見て分かるという言葉が使われています。

異端的な教えを聞いて、グノーシス主義の流れを受けた聖書から逸脱した教えを聞いて、クリスチャンはそれを直覚的に知るのです。「何か間違っているのではないか。」具体的にはどこがどう間違っているか分からなくても「何かおかしい、胡散臭いな。」とか、違和感を感じる。それがここで言う「知識」のことです。それがここで言う「オイダ」または「エイド」ということでもあります。なぜならば **20 節** に『あなたがたには聖なる方からの注ぎの油がある』からです。すなわち聖霊が注がれているので、聖霊があなたに真理を教えてくれるわけです。この方は「真理の御霊」とも呼ばれています。ですからあなたは別にエホバの証人の教理を知らなくても、モルモン教や統一協会の教理を知らなくても、または言葉信仰と呼ばれる人たちの繁栄の福音の教えを知らなくても、それを聞くと「何かこれはおかしいぞ。何か胡散臭いな。」違和感を感じるわけです。どこか間違っている、ずれている。そういう感覚をふと抱くわけです。それが聖霊から来ているんだということです。経験的に知るというのは、カルトについて研究してそれを知識として蓄積していく中で、分析する中で知っていく。それが「ギノスコー」ですけれども、勿論そういう知り方も出来るんですが、でも必ずしもそうしなくてもいいと言っているわけです。ですから皆さんに私は、キリスト教系の三大異端について深く学べとは要求しません。そんなことをする必要は実はないんです。本物を知って下さい。本物を知ればすぐに偽物は見分けられます。本物をまず学んだ上で、それでもまだ興味があるならば、そうした異端的な教えについても参考までに知識を得ていく必要は確かにあるかもしれませんが、すべてのクリスチャンがそうする必要はありません。なぜならばすべてをクリスチャンには聖霊が与えられているからです。むしろあなたは本物を学ぶべきであります。御言葉そのものをしっかり学んでいくべきです。「聖書なんか要らない。聖書が全てではない。」そういう教えを説くならば、またはそういう考えをしているならば、その人は反キリストであります。エホバの証人は聖書も使います。モルモン教も統一協会も皆聖書を使います。でも「聖書が全てではない。聖書ですべて解決出来るわけではない。

プラスアルファが必要である。聖書を理解するためには〇〇が必要です。」と。「原理講論がなければ。」とか、「モルモン経がなければ。」といろいろなことを彼らは説くわけですが、聖書が全てではない。聖書ですべて事足りるわけではない。聖書の中にすべての解決があるわけではない。」そのように主張する人たち、彼らは皆反キリストです。または自由主義神学というものも同じであります。自由主義神学では、イエスの神性を否定します。「イエスは処女から生まれたわけではない。イエスは文字通り復活したわけではない。イエスは奇跡を行ったわけではない。」と自由主義神学はそのように教えます。リベラルと呼ばれるグループです。気を付けて下さい。それはプロテスタントの中にも存在します。

もう一度テキストに戻って頂きたいですけれども、続きとして **21 節** のところには「偽り」という言葉があります。**22 節** のところには「偽り者」という言葉があります。まことしやかに聞こえても、聖書から外れていたならば、すべてそれは偽りです。聖句が使われていたとしても、それが文脈から外されて独り歩きしているようであれば、それはすべて偽りです。その教えを説く者は皆嘘つきであります。サタンでも聖句を引用するわけです。サタンは「偽りの父」と呼ばれています。まことしやかに悪霊の教えを説くためには、勿論聖書という言葉を利用するわけです、濫用するわけです。ですから異端もカルトも皆聖書を使います。聖書を使わなければ自分たちの教えを正当化も出来ないですし、権威付けも出来ないからです。「聖書には権威がある。」それは悪魔も認めているんです。それはカルトも認めているんです。「でもそれだけでは十分ではありませんよ。プラスアルファ必要ですよ。」と、これがカルトの巧妙な手口であります。「聖書も素晴らしい。聖書も使います。聖書の中にも一定の真理はあります。でもそれだけがすべてではありませんよ。」と。気を付けたいと思います。

そして **22 節** のところに、反キリストとはハッキリと書いてあります。イエスがキリストであることを否定する者であり、御父と御子を否認する者である。それが反キリストであると。言い方を変えれば「イエスは神ではない。イエスは父なる神と同等ではない。」御父と御子を否認するというのは、「イエスが父とひとつである。わたしと父はひとつである。」というそのイエスの宣言を否定する者。イエスが子なる神であるということを否定する者、それが反キリストであると言っているわけです。「イエスは神ではなくて、神に造られた被造物に過ぎない。イエスは天使である。」とか、そのように主張する者たち、それらは皆反キリストであります。

第二コリント 11:4 を開いてみて下さい。『4 というわけは、ある人が来て(ある人というのは反キリストのことです。偽教師、偽牧師、偽宣教師、偽伝道者です。)、私たちの宣べ伝えなかつた別のイエスを宣べ伝えたり(イエスを宣べ伝えるんですが、それは別のイエスです。信仰教師たちが説くようなイエスです。)、あるいはあなたがたが、前に受けたことのない異なった霊を受けたり、受け入れたことのない異なった福音を受けたりするとき(繁栄の福音であったり、「それは皆油注ぎだ。聖霊の働きだ。」とか、そういうものです。でも実際にはすべて聖書には書かれていない、聖書から全く逸脱した、外れてしまった教えです。その時も)、あなたがたはみごとにこらえているからです。』**飛んで 13 節**『¹³ こういう者たちは、にせ使徒であり、人を欺く働き人であって、キリストの使徒に変装しているのです。¹⁴ しかし、驚くには及びません。サタンさえ光の御使いに変装するのです。』と。教会の中には牧師を名乗りながらも、クリスチャンでもない偽牧師が存在します。彼らは別のイエス、異なった霊、異なった福音を宣べ伝えます。特にこの『別のイエス』というのは、「イエスご自身が宣言された通りのお方ではない。すなわちイエスはヤーウェではない。神ではない。」と。むしろ「イエスは私たちクリスチャンと同じような存在である。」と。完全におとしめられているわけです。完全にイエス・キリストを過小評価しているわけです。その卓越性というものを否定しているわけです。

同じく**第二コリント 5:18~19** もついでに見て頂きたいと思います。「イエスが神ではない。」と主張する人たちに對して是非分かち合つて頂きたい聖句でもあります。『¹⁸ これらのことはすべて、神から出ているのです。(神から出ていることとして)神は、キリストによって、私たちをご自分と和解させ、また和解の務めを私たちに与えてくださいました。(「キリストによって」というところは、むしろ「キリストにあって」と。「キリストのうちに」というのが正しい訳です。神はキリストのうちにおられたのです。どの時かというと十字架につけられる時です。父なる神は御子イエス・キリストのうちにあって共に十字架の苦しみを負われたということがここに書いてあるんです。「イエスは神ではない。」グノーシ

ス主義者は「キリストの霊が神であって、イエスは神ではない。十字架につけられる時にはキリストの霊はイエスという肉体から離れていったんだ。」と。でもハッキリと聖書は、これは神から出ていることとして、神が保証して太鼓判を押していることとして、「神は、キリストによって」正確には「キリストのうちに、キリストにあって、私たちをご自分と和解させ、また和解の務めを私たちに与えてくださいました。』¹⁹ すなわち、神は、キリストにあって、この世をご自分と和解させ、違反行為の責めを人々に負わせないで、和解のことばを私たちにゆだねられたのです。』

「神はキリストにあって」キーワードです。ですから、もし仮に「イエスは神ではない。」と主張したとします。その神でないイエス・キリストがすべての人の罪を負って十字架につけられ、エホバの証人では十字架ということすら否定して「イエスは十字架ではなくて、杭にかけられたんだ。」と言いますけれども、いずれにしても罪を負って贖いの死を遂げられたと。でも「それは神ではなかった。人間だった。」と主張するならば、または「天使だった。」と主張するならば、それは神を冒瀆することです。神ご自身が死なれたんです。神はキリストのうちにあったんです。勿論物理的に死なれたのは、イエス・キリストという肉体をとられた神でありましたけれども、父もまた一緒に和解の務めを果たされたんです。ですから、「イエスがただの被造物に過ぎなかった。」と言うのは、これは神を侮辱することです。エホバを侮辱することです。エホバの証人は「エホバが死んだわけではない。」と言います。「イエスは死んだ。」と、「イエスは杭につけられて罪を負って死んだんだ。」と、そのように主張します。でも、聖書によれば、仮に“エホバ”という言葉借りて表現すれば、エホバという父なる神はキリストのうちにあって共にこの和解の務めを果たされたということです。言い換えれば、神が、エホバが死んだということです。死んだのは被造物ではなくて、造られたものではなくて、神ご自身であった。神が死なれたのに「否、死んだのは神ではない。ただの被造物です。人間です。若しくは天使です。」と主張するならば、それは神を、エホバを愚弄することです、侮辱することです、冒瀆することです。

ヨハネ 3:16 にも『神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。』神ご自身を与えたほどに世を愛されたと、私たちは見るわけですが、勿論異端はそうは見ません。ひとり子イエス・キリストは神ではないからです。『被造物を与えたほどに世を愛された。』それが異端の、カルトの主張であります。神の愛はその程度のものでしょうか。私たちのために被造物を与えたほどに。それならば神でなくても出来ることです。自分の子供のために喜んで身代わりになって死ぬ親はいくらでもいると思います。また「喜んで大勢の者のために自分一人の命で多くの人の命が助かるならば、喜んでこの命を捧げましょう。」と言う英雄と呼ばれる、偉人と呼ばれる人間はいくらでもいると思います。歴史上も確かにそういう人たちは存在しました。それは人間でも出来ることでもあります。それは人間の愛でもあります。でも、神は被造物ではなくて神ご自身、神を私たちに与えるほどに、ひとり子である神を与えるほどに私たちに愛してくださったのです。この愛は人知をはるかに超えた愛です。十字架の愛は計り知れない愛であります。そこは驚くべき愛です。驚くべき恵みです。でも、これがただの人間だったら別に驚きません。そういう愛ならば、その辺にゴロゴロしています。何の特別なものでもありません。素晴らしいですけれども、でも際立っているわけではない。人知をはるかに超えた愛とはとても言えないと。でもこれが、神が神ご自身を与える愛であるならば、これは驚くべきもの、これは唯一無二のもの、その辺にあるものではない。人間のうちに見られるものではないと。そんな愛は他にはない。これこそまさに神の愛だと。人間レベルをはるかに超えたものだと言えるわけです。ですから、イエスを神ではないと主張するならば、神ご自身を、エホバを、主を、聖書の神を真っ向から否定すること。御父も御子も否認することになるわけです。

23 節も、これもやはりキリスト教系の異端に贈りたい言葉です。『だれでも御子を否認する者は、御父を持たず(エホバの証人にしてみれば、エホバを持たず)、御子を告白する者は、御父をも持っているのです。』と。私たちは御子を告白する者であります。皆さんも大胆に「イエスが神の子キリストである。」と宣言して頂きたいと思います。大胆に「イエスは神だ。」と宣言して欲しいと思います。

マタイの福音書 10:32~33 を参考までにお読みします。『³² ですから、わたしを人の前で認める者はみな、わたしも、天におられるわたしの父の前でその人を認めます。³³ しかし、人の前でわたしを知らないと言

うような者なら、わたしも天におられるわたしの父の前で、そんな者は知らないと言います。』

「イエス・キリストの話なんかしたら嫌われてしまう。変に思われる。馬鹿にされる。もう付き合ってもらえないかもしれない。絶交されるかもしれない。黙っておこう。イエスが神だ、なんて言ったらキチガイだと思われる。」イエスがキリスト教の開祖とか、聖人の 1 人とか、道徳の教師の 1 人という認識で話すぐらいならば、多分そんなに波風立たずに受け入れてもらえるかもしれませんが、イエスが神であると言うようになると人々に対してあなたはどちらかに選択するように迫る発言をする、宣言をするわけです。イエスはあなたにとって神か、そうではないか。ただのキチガイか、悪魔か、それとも神なのか。神であるならばあなたはこの方の前に平伏す必要がある。この方を信じて礼拝する必要がある。そのことをあなたは迫るわけです。「でも、そんな事をしたら嫌われてしまう。そんなことをしたら私が精神病扱いされてしまう、異常者だと言われてしまう。大事な友だちを失う。家族から疎外される。だから伏せておこう。黙っておこう。」そういう者はここに書かれている通りです。天におられる父はあなたのことも認めてくれません。誰から認めてもらいたいのでしょうか。「良い人だと認めてもらいたい、賢い人だと認めてもらいたい、素晴らしい出来る人と認めてもらいたい。だからイエスのことはあまり口にしないでおこう。」それよりもあなたは父なる神様から認められたいとは願わないのでしょうか。だれでも御子を否認する者は御父を持たず、御子を告白する者は御父をも持っているのです。これは私たちクリスチャンにも向けられるべき言葉だと思います。異端的な教えをする人たちだけに突きつける聖句ではありません。

そして 24 節以降もお読みします。「とどまる」という言葉が連発して使われています。『あなたがたは、初めから聞いたことを(この「初めから聞いたこと」というのは、聖書の教えです。昔から、古代から聖書の中に書かれていることです。旧約聖書の中にもイエスがキリストであるということが書かれています。)、自分たちのうちにとどまらせなさい。もし初めから聞いたことがとどまっているなら、あなたがたも御子および御父のうちにとどまるのです。』と。教会から離れてしまう、出て行ってしまう。そして、「聖書がすべてではない。」勝手な聖書解釈を持って、私的解釈を持って、勝手なキリストイメージを持って、キリスト像を持って、自分にとって信じやすい都合の良い聖書の御言葉の解釈。または都合のいいイエス・キリストを信じていくということ。これはすべて反キリストであります。それは救いには繋がりません。とどまらなければ、25 節を見て下さい。それがとどまるということです。『それがキリストご自身の私たちに与えになった約束であって、永遠のいのちです。』「とどまる」という言葉、これは特にヨハネの福音書 15 章にも使われています。イエス・キリストがヤーウェ宣言をしたところでもあります。「まことのぶどうの木」という宣言です。そこで、「とどまりなさい。あなたがたは枝です。」と言って、「とどまりなさい。わたしの言葉にとどまりなさい。わたしの愛にとどまりなさい。」とイエスが弟子たちに教えたところでもあります。イエス・キリストにとどまるならば、その人はイエス・キリストの体のうちにとどまるはずであります。「体なんか要らない。教会なんか要らない。」と、恐ろしい話です。イエスの首だけでいいと言っているわけです。教会の頭はキリストであります。「体は要らない。生首だけでいい。」恐ろしい狂気の沙汰であります。

26 節。『私は、あなたがたを惑わそうとする人たちについて以上のことを書いて来ました。』3 番目の、3 種類目の特徴として、暗闇について、反キリストについて、教会を去って離れて行く人たち、キリストの神性を否定する人たち。そして3 番目としてこの人たちは、惑わそうとする者たちです。気を付けて下さい。惑わそうとします。最後まで通してお読みしますけれども 27 節以降です。『²⁷あなたがたのばあいは、キリストから受けた注ぎの油があなたがたのうちにとどまっています。(聖霊のことです。とどまっています。)それで、だれからも教えを受ける必要がありません。彼の油がすべてのことについてあなたがたを教えるように、—その教えは真理であって偽りではありません。—また、その油があなたがたに教えたとおりに(聖霊が教えたとおりに)、あなたがたはキリストのうちにとどまるのです。(聖霊があなたの個人的な家庭教師のようにして教えて下さいます。)²⁸そこで、子どもたちよ。キリストのうちにとどまっていなさい。(聖霊の教えは、常にキリストのうちにとどまるということです。キリストのうちにとどまるということは先ほども読みましたが、キリストの体のうちにも、教会にもとどまるということですから、教会を離れた、または教会を去って行った者たちの教えというのは、聖霊によるものではないということも判明します。聖霊はキリストのものを受けて、キ

リストのものを私たちに教えるわけです。これもヨハネの福音書 14 章 16 章に、聖霊がどのような働きをするのか教えられているところでもあります。)それは、キリストが現われるとき、私たちが信頼を持ち(確信を持ちということです)、その来臨のときに(携挙のときに)、御前で恥じ入るといことのないためです。(イエスが神であると信じる者たちは、携挙のときには当然恥じ入ることはありません。でも、イエスが神ではないと主張した者たちは、必ずそのときには恥じ入ることになります。グノーシス主義者は皆恥じ入ることになります。エホバの証人も、モルモン教徒も、統一協会員も、皆恥じ入ることになります。勿論信仰教師と呼ばれる者たちもそうです。また、ヒューマニストもそうです。「イエスはただの人間である。道徳の教師、聖人の 1 人である。」と言う人たちも皆恥じ入ることになります。) ²⁹もしあなたがたが、神は正しい方であると知っているなら(これは「オイダ」「エイド」ですから、直覚的に知る、直感的に知るという言葉です。)、義を行なう者がみな神から生まれたこともわかるはずで。す。「わかる」も同じ言葉です。)』そのようにして真のクリスチャンは、聖霊を受けていますから、聖霊によって直覚的な知識を与えられます。

ただ、もう 1 つ誤解しないで頂きたいのは、特に 27 節にあるフレーズとして『**だれからも教える必要がありません。**』これも実は異端の人たちが、カルトの人たちが取り上げる、都合よく文脈から外した形で取り上げるフレーズです。「私たちは誰からも教える必要はありません。教会に行く必要はありません。牧師の教えるを受けなくてもいいです。」文脈から外れています。「教会に行かなければ聖書を学ぶことは出来ない。」勿論そうではありません。家でも学ぶことは出来ます。でも、だからといって「教会は必要ない。」とか、「バイブル・スタディーに行かなくてもいい。」という話ではありません。また、だからといって「聖書教師、牧師が要らない、必要ない。」というわけではありません。文脈は、これは反キリストに対して、偽教師・偽牧師に対してこのことが語られていることを忘れてはいけません。この教えというのは、偽キリスト・反キリスト・偽教師・偽牧師たちのその間違った、聖書から逸脱した教え、それを見分けるということがここで言われている文脈であります。それを誰からも教えられないこともなくあなたは直感的に「これはおかしい。これは聖書に書かれていないことだ。違和感を感じる。」それがここで言われている『**必要がない**』と言っていることです。わざわざエホバの証人の教理についてあなたは研究する必要はないんです。モルモン教や統一協会についていちいち調べる必要はないんです。誰からも教えられなくても聖霊があなたに真理を教えてくださいますから。勿論聖霊が神の靈感によってこの聖書を書いたわけですし、またこの聖霊が賜物を、教える賜物・指導する賜物・預言の賜物・知識の言葉といった聖霊の賜物、御霊の賜物を牧師などに与えておりますから、牧師が教えてくれるわけです。聖霊の賜物を持った者たちが、正しい真理を教えてくださいます。

エペソ人への手紙 4 章にもこう書いてあります。これは第一ヨハネの宛先でもあります。エペソ教会に宛てた手紙でもありますので。『¹¹ こうして、キリストご自身が(イエス・キリストご自身が)、ある人を使徒、ある人を預言者、ある人を伝道者、ある人を牧師また教師として、お立てになったのです。』牧師・教師と呼ばれる者たちは、キリストご自身がお立てになったのです。にもかかわらず「否、私は誰からも教える必要はありません。牧師なんか要らないです。教会なんか無くたって良いです。自分 1 人でも聖書を読めますし、教会に行かなくたって礼拝も出来ますから。」牧師の言うことがすべて勿論正しいというわけではありません。ですから聖書では「常に吟味しなさい。」とされています。預言者の預言でも吟味しなさいとされています。それは履き違えてはいけません。でも、牧師というものは聖霊の賜物を受けて、油注ぎを受けて、神の召命を受けて、キリストご自身が教会に立てるものでもあります。ですからその次にも『¹² それは、聖徒たちを整えて奉仕の働きをさせ、キリストのからだを建て上げるためであり、¹³ ついに、私たちがみな、信仰の一致と神の御子に関する知識の一致とに達し、完全におとなになって、キリストの満ち満ちた身たけにまで達するためです。¹⁴ それは、私たちがもはや、子どもではなくて、人の悪巧みや、人を欺く悪賢い策略により、教えの風に吹き回されたり、波にもたせられたりすることがなく、¹⁵ むしろ、愛をもって真理を語り、あらゆる点において成長し、かしらなるキリストに達することができるためなのです。¹⁶ キリストによって、からだ全体は、一つ一つの部分はその力量にふさわしく働く力により、また、備えられたあらゆる結び目によって、しっかりと組み合わされ、結び合わされ、成長して、愛のうちに建てられるのです。』教会はキリストの体です。体に属さないというのは、全くバラバラ死体と同じであります。そもそもその人たちは、キリストの一部でなかったかもしれません。

体の一部でなかったかもしれない。救われていなかったかもしれない、という可能性すら示唆されるわけです。

今日はこれで終わりたいと思いますけれども、**第一ヨハネ 2 章 29 節**まで見たわけですが、章と節が分かれていますけれども、**3 章**以降も同じ背景を持っています。グノーシス主義というものがその背後にあります。一貫した共通したテーマは、神を経験するということです。特に今カバーしたところは、**1 章 2 章**のところですので、**神の光を経験する**ということです。神の光の中を歩む、神と交わりを持つということはどういうことなのか。具体的にこういうことです。逆説的な言い方として、こういうことをしている者は、こういうことをまたはしていない者は、光の中を歩んでいない。神の光を経験していないというような言い方で具体的に説明されていたわけです。ですから、是非皆さんも自己吟味してみてください。私はどうなのか。私は神の光を経験しているだろうか。教会を出て行った、去って行ったあの人のことを今考えているならば、やめて下さい。その人の前に、まずあなたがどうなのか。それが肝要であります。勿論彼らにもあなたは伝えるべきメッセージが与えられているかもしれませんが。是非、イエスがキリストであるということが必要な人たちに語って欲しいと思います。クリスチャンと自称する人たちでも実は永遠の命を持っていない人たちもいるわけです。とどまっていない者は、皆永遠の命を持っていない者たちであります。御父を持っていない者たち、御子をもっていない者たちというふうにも言われていますので、是非彼らを断罪するのではなくて、むしろ彼らは救いを必要とする人たちだと見て頂いて、憐れみを持って、寛容さ、忍耐を持って、愛を持って真理を語って頂きたいと思います。そのことをヨハネは私たちにも「**小さい者たちよ。**」私たちは常にへりくだって本当に信仰のイロハというものを何度も教えられながら、「もうそれは聞いた。それは分かっている。」ではなくて、何度も聞きながら自己吟味をし、検証して、そして自分が今本当に暗闇の中にいないだろうか。もし暗闇の中にあるならば、その自分を発見したならば、改めてキリストの血にすがって頂いて、すべての罪を、すべての悪を洗い清めて頂くということを願ひ求めなければなりません。そうすることであなたは、新たな思いで光の中を歩む喜びに満ち満ちると思います。そうすることでもうあなたの暗さはどこかへ吹っ飛んで行くと思います。本当に輝くようになり、ニコニコするようになり、作り笑いをする必要もありません。元気ではないのに「元気です。大丈夫です。何の問題もありません。」と粹がったり、背伸びする必要はありません。本当に心底「今喜びで満ち満ちているんです。今の私は光の中で本当に神との交わりをエンジョイ出来ているんです。」と、そのように大胆に確信を持って語る事が出来るように。イエス・キリストが戻って来られる時には、恥じ入る者ではないように。「携挙の時にきっと私は恥じ入ってしまうに違いない。」そう今自分のことを見ているならば、今がチャンスです。今はまだ携挙されていないわけですから、今がチャンスですから、是非次の瞬間携挙があるかもしれませんので、後回しにしないで、恥じ入ることがない自分に。本当にキリストが現れる時に私たちは信頼を持ち確信を持って**主の前**で恥じ入ることがない自分になっていく必要があるということ今一度覚えて、今日のレッスンを、今日の学びを、是非自分にまずは当てはめて、適用して頂きたいと思います。では、これで終わりたいと思います。